

大学生のキャリア意識と進路不決断について

要旨

近年、大学生たちの中には進路の決定ができない、もしくは決定を延期しているといった問題を抱えた者が少なくない（神近, 2013）。従来の進路決定の研究におけるアプローチでは、「人と環境」の相互作用によって、キャリア選択が決定すると考えられてきた。しかし、21世紀に入ると変動が激しい社会において、個人のキャリアは将来の予測が難しく、1つのキャリア理論で全てを説明できるようなことにはない。特に、キャリアが「人によって異なるユニークさ」、個人がそれを追求することによってのみ存在する点について、日本の従来の価値観の中では焦点化されてこなかった。日本を含むアジアにおけるキャリア研究でも、「個別性」という視点を取り入れて検討される必要があると考えられる。

本研究では大学生の就職動機の強さに影響している要因を明らかにするため、個人的な要因に特に注目した。下山（1986）は、職業未決定はアイデンティティの未発達と密接に結びついており、職業決定は青年期の自我の確立のあり様を評価する重要な指標であることと仮定している。このように、自己の確立の未熟さがキャリア選択に否定的な影響を与えていると考えられる一方で、「自分らしい」とか「個性」をいかして職業を決めたいという、むしろ自己への過剰なこだわりが職業の決定を妨げているとも考えられる。進路不決断は、自分らしさや個性を一貫させようとする傾向と関係しているか検討する必要がある。そして、本研究は就職前後の自己イメージを比べ、大学生の就職動機の強さに影響している要因を明らかにする。進路不決断は、自分らしさや個性を一貫させようとする傾向と関係しているか男女別に検討することを目的とした。仮説としては、今の自分というものと仕事している自分が一致すると、

進路決定できるようになると考えられる。

本調査は、九州のある4年制市立大学の大学生161名を対象に実施された。質問紙は3部構成で、第1部はキャリア意思決定尺度と卒業後の進路希望についての質問項目、第2部は現在と就職後の性格特性を比較する尺度、第3部は希望職業と3回の性格特性尺度を中心に構成されている。

本調査におけるキャリア意思決定尺度を用いた測定では、進路不決断に関する35項目について「今あなたは就職のことについて、どのように感じています」という質問に対する回答と清水ら（2007）と同様に進路不決断の領域を7つ当てはめたものを用いた。

進路不決断合計点の女子と男子の平均点の差が統計的に有意かを確かめるために、有意水準5%で両側検定のt検定を行ったところ、 $t(136) = 0.0082, p = .99$ であり、女子と男子の平均点の差に有意差は見られなかった（女子： $M = 89.52, SD = 18.21$ ；男子： $M = 89.49, SD = 17.52, t(136) = 0.0082, p < .05$ ）。性別による進路不安の違いが認められなかった。

続けて、大学生の希望職業に関する質問では、男女において共通傾向があり、最も就きたい職業として公務員が選ばれた。この結果について、調査対象がほぼ大学1年や2年の文系の学生となったため、選択場面が狭く、安定した仕事を志望したという可能性があると考えられた。

本研究では、就業前後の自己イメージを比較するため、性格特性尺度の測定は3回行った。「今の自分の性格について、どう思いますか」を「現実の自己」の性格特性と命名、「将来、あなたは就職してから、仕事中どんな自分でいたいですか」を「将来の自己」の性格特性と命名、「一番理想の職業についたとしたら、その仕事をしている時、どんな自

分でいると思いますか」を「適職の自己」の性格特性と命名した。

就職前後の自己性格特性からの変化と進路不決断と関係しているかを検討したところ、進路不決断は自分らしさや個性を一貫させようとする傾向と関係していることが明らかになった。これについて、「自分」と「職業」の適切性より、現実の自分というものと仕事している自分が一致することが進路不決断を防止することになるが検討された。仮説に沿っており予測通りであった。

また、進路不決断傾向に対してどのような性格特性が影響しているかについて、「心配症で、うろたえやすい」「人に気をつかう、やさしい」という繊細性が高い人は進路不決断になりやすく、逆に、外向的、協調性が高い人は職業決定に向かって進んでいることが想定できた。一方、「将来の自己」の性格特性と「適職の自己」の性格特性の因子分析がうまくいかなかったことにより、大学生の仮想の自己イメージを十分に形成していない可能性を示した。

性差が存在することも明らかになった。男子は、「現実の自己」と「将来の自己」の差と進路不決断とは有意な正の偏相関がみられたため、自分を変えたくない、そのままの自己への過剰なこだわりが職業の決定を妨げていると考えられる。女子は、「将来の自己」と「適職の自己」の差と進路不決断とは有意な正の偏相関がみられたため、普通の職業より、一番理想の職業につきたいなら、自分を変えなければならないと感じ、自分を変えることを避けるような進路を選択することが推測される。このような結果は、男女の職業観の違いが反映されている可能性もあろう。男女では、仕事のオリエンテーションと職業的価値（結婚、出産、仕事のバランス）の違いにより、男性と女性は進路決定に関与する経路と要因が異なることが予想される（安達，2001）。